

山崎郷土叢

NO. 97

13.4.20

兵庫県粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話62-2000

御師にひかれて伊勢参り

織 金 達 雄

二〇〇〇年十二月、旅の研究所主催、読売新聞社後援で「御師おんしにひかれて伊勢参り」というタイトルで伊勢文化フォーラムが開催されるということを知りました。

それについて調べてみると近世の「旅の大衆化」と巨大大情報装おんし置としてお伊勢さんを考えるというシンポジウムで「なぜ、人々はお伊勢さんをめざしたか」というお話であることを知り、国内旅行を生きがいとしている自分として、近世旅行の原点であったお伊勢参りの始まりから今日のバスツアーまでどのような流れがあったのだろうか、それを知りたくて伊勢神宮内宮前の神宮会館まで足を運びました。

伊勢神宮は皇室の祖神であって、古来、天皇のみが伊勢神宮への幣帛（捧げ物）を供えることができ、一般の者には許されていませんでした。鎌倉時代になって、伊勢神宮の権禰宜ごんぬぎが御師職となつて一般からの祈願や捧げ物を取り扱うようになりました。室

目 次

① 御師にひかれて伊勢参り	織金 達雄	1
② 六粟郡金屋村 鑄物師長谷川氏について	片山 昭悟	4
③ 一枚の古写真から	岸本 正理	9
④ 生谷温泉記	大谷 司郎	9
⑤ 都七福神巡りと岩倉実相院詣り	研 修 部	13
⑥ 山崎町歴史街道（四）	会 報 部	15
⑦ 事務局だより	事 務 局	16
⑧ 平成十三・十四年度役員一覧表	事 務 局	17

町時代に入ると御師たちは全国を回ってお札を頒布するとともに伊勢神宮参拜のお世話をするようになったのがお伊勢参りの始まりです。ただし、この頃、お伊勢参りができたのは限られた人たちだけでした。

江戸時代になると天照大神を慕う庶民は一生に一度でいいからお伊勢参りをしたいと願いました。この願いが「おかげ参り」につながったのです。

おかげ参りは江戸時代に十数回流行しましたが、全国的な規模では宝永二年（一七〇五）・明和八年（一七七二）・文政十三年

(一八三〇)の三回が知られています。なかでも文政時は「おかげ年」といって明和のおかげ参りから六十年目におかげ参りが起こるといふ風評が流布していたこともあって最高に盛り上がり、参拝者数は四百万人にもなったといわれています。

文政のおかげ参りでは、特に町ぐるみ・村ぐるみでのお伊勢参りが目立つようになり、民衆は伊勢の神様のおかげを被るといふ口実のもと、おかげ参りによって、日常生活から抜け出して束の間の解放感を味わったのです。

その当時は「抜け参り」といって主人・親に無断で、施行(接待)を当て込んで、殆ど路銀を持たずに参宮する者も多数あったようです。

封建制度の下での厳しい関所でさえ「おかげ参りならしかたがない」と手形なしでも通過させてくれました。

その当時は時代背景として、社会情勢は鎖国政策のため民衆は内に向かって動きだしました。また、参勤交代により、公共事業が内需拡大となって、道路もよくなり、



一〇kmに一つの割合で宿場もできて旅行事情がよくなりました。その当時は年貢税制であり、農作物以外の稼ぎには課税されない面もあって可処分所得も大きくなりました。

また、女性にも収入を得るための仕事はあったので「江戸時代女性たちの伊勢参詣日記」に見られるように、女性たちの旅の記録が残されています。なかでも、天保十二年(一八四一)福岡の小田宅子(商家妻五十三才)の東路日記では目的を伊勢詣として約五ヶ月にわたって厳島―金比羅―大坂―伊勢―善光寺―江戸―と旅しています。

おかげ参りにも本音と建前があり、「精進落とし」といって、つぎのようなものもありました。

・遊郭

古市(中之地藏町・堂明寺門前)：備前屋・油屋・杉本屋
など

妓 楼 娼 妓(茶汲み女)

天明期 七〇余 一〇〇〇余

嘉永期 四〇軒 七八〇名

明治五 三三戸 六四〇名

(この前年〔明治四〕には廃止令により、御師がなくなり、旅行の発信基地であったインターネットの回線が切られました。)

・伊勢歌舞伎

妙見・古市：長盛座 中之地藏に三座：田舎芝居

以上、旅人の側(Guest)について申しましたが、「御師

は、どのように旅を演出したか」と受入れ側（Host）について簡記しておきます。

1 御師は旅行業の開祖として、神職から旅行周旋業へと移っていき、元禄旅行業（エージェンシー）として、日本中をマーケットにしていました。

2 お伊勢参りの周知・宣伝を兼ねた物販業

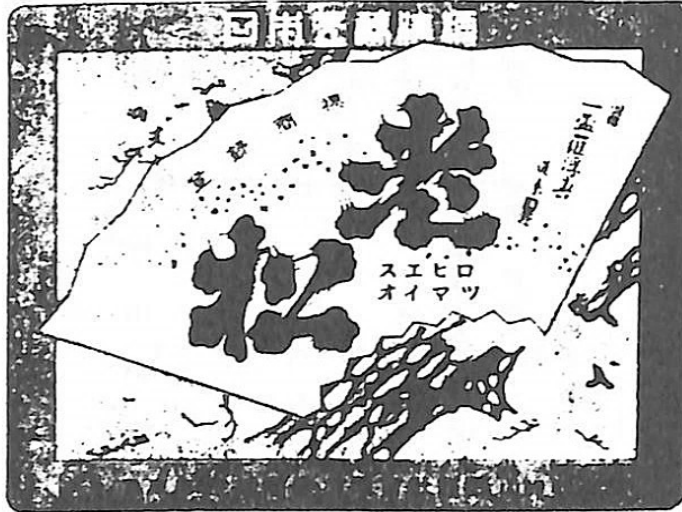
伊勢神宮の外宮が農業の神様である報豊受大神を祀っているところから、農家にとっての百科事典である農事暦（絵ときよみ）を作り、御祓大麻、神宮暦、土産を檀家に配って歩きました。「檀家は初穂料を出します」

3 集落

講を作り、伊勢へ案内します。御師は直接しないが手代が講をまとめます。

4 旅館

御師は檀家を出迎え、自分のやかたに泊めて、神楽、祈禱、御膳、参拝案内をし、檀家から神楽料、お供え料、止宿料を頂きます。



※ 土産

薬、伊勢おしろい、茶、ふのり、熨斗、帯、櫛、扇、箸など

※ 全国に頒布される伊勢神宮のお札

伊勢神宮のお札は神宮大麻といえます。その歴史は古く、一般から神社へ供えられる捧げ物や一般の祈願を取り扱っていた御師職が、鎌倉時代から全国に「お伊勢さんのお札」として頒布されていたのが始まりです。江戸時代には日本の全戸数の八割が神宮大麻の配付を受けていたという記録も残されています。

現在は伊勢神宮で奉製し、伊勢神宮から神社本庁が委託を受けて、各都道府県の神社庁と神職、氏子総代、崇敬者総代を通じて各家庭に頒布しています。

宍粟郡金屋村鑄物師長谷川氏について

片山 昭悟

はじめに

江戸時代の宍粟郡金屋村鑄物師長谷川氏については、これまで『山崎郷土会報』に八十九号（平成九年）に「金谷譲尾の観音様と金屋村鑄物師長谷川氏について」、九十号（平成九年）に「長谷川孫兵衛・五郎兵衛製作による梵鐘・半鐘集成」などに発表してきたが、平成十二年四月に、拙著『宍粟郡の梵鐘』としてまとめている。

現在、山崎町の下水道工事が金谷で行われているが、平成十三年二月十九日に地元の長谷川喜一氏に聞き取り調査を行った。

これまで金屋村鑄物師については、宍粟郡の鉄山研究の第一人者である宇野正碓先生や広島大学の先生が現地調査を行っておられる。そして、宇野先生が『山崎町史』「第四編近世 第七章 鋳工業 第三節 金屋は鑄物の村・梵鐘銘に残る長谷川氏」に詳しく紹介されている。

私の今回の調査では、

- ① 金谷の村名となった「金屋」について
- 金屋村に鑄物師が存在していたことについて
- ② なぜ金谷の地であったのか

- ③ 梵鐘、半鐘、鍋、釜の鑄造遺構の分布状況について
 - ④ 鑄物師の全体の現存状況について
- などを中心にして調査を行った。

今回の聞き取り調査で、金屋村鑄物師について解明できたことを書きとどめる。

1 鑄物師跡の範囲について

金谷字堂の前一帯にかけて五、六軒の鑄物師が存在していた。

2 「吹き屋」と「ふいご」という呼び

名の遺称名が残っていること。

位置については、

長谷川喜一氏宅前の石垣の続きで、ブロックで土止めをされて今は見られない。

3

伝承地の住吉神社の位置について



「吹き屋」と「ふいご」という呼び名の遺称地の南の水田にはかつて住吉神社が存在していたこと。

4 石垣遺構について

大規模な江戸時代のものでされる石垣遺構が現存している。

水路についても古いようである。

5 金谷の堂の前には、製品をつくったところとされる製錬所

(製錬遺構) が2箇所あったこと

現遊鶴寺から大歳神社の西一帯とすりばち池の東、森崎氏の水田にあった。

6 梵鐘、鍋や釜をつ

くるのに鋳滓を流したところについて

鋳滓の散布は長

谷川喜一氏宅や長

谷川孝氏宅から谷

川一帯にかけて散

布している。中に

は鋳型やふいごの

羽口もみえる。

谷川一帯の鋳滓は、

河川改修が行われ

呉服とジュエリー



本店 本町(さつき通り) 62-1680

咲ランド3F呉服のとくさや 63-0568
" 2Fジュエリーのとくさや 63-0557

て今は見られない状態である。

7 長谷山遊鶴寺との関係について

遊鶴寺は、讓尾から観音藪にかけて山岳寺院が十六ヶ寺あった天正のころに建立されていた時代と明治時代に観音山の中腹にあったころ、そして、昭和二十四年頃に現在の堂の前の遊鶴寺に移ったところと、遊鶴寺は三回も移動している。

そして、現遊鶴寺にある石塔は、讓尾の時期の古いものである。

讓尾にあった遊鶴寺は天正のころに羽柴(豊臣)秀吉に攻められ柏原城とともに焼失されている。

その後山崎の明源寺へ伝わっている。同寺は上比地や金谷ともつながりが今もあり、山号は遊鶴山である。

なぜ金谷に梵鐘をつくるようになったかを考察する。

1 地理的条件が適したことが上げられる。

① 原料が調達できたこと

梵鐘や鍋や釜などの铸件は青銅で、坪井良平『日本の梵鐘』によると、銅八六パーセントと錫十三パーセントの合金で少量の亜鉛からできている。

原料の銅については、金谷でなく近くで入手できたのであろう。

安栗郡では江戸時代の銅を産する地は、山崎町川戸と一宮

町で産出したようである。

『山崎町史』によると、

山崎町川戸で天和三年（一六八三）に大坂南本町平野屋清右衛門が「極堀」を願い出ている。宝暦七年（一七五七）にも銅山願いが出されている。

一宮町では、

「富土野銅出 慶安四年（一六五二）八月五日

富土野銅山及吟味慶安四年八月十五日」とある。

播磨国では野里鋳物師の芥田氏が統領職として知られるので、関わりがあったのではないか。

② 梵鐘や鍋や釜をつくるには多量の炭が必要であったこと

国見山の麓で山に木が豊富にある。

③ 近くに水があること

湯船の池からの水路と谷川の水があり、水量が豊富である。

④ 風が吹くこと

金谷の堂の前は、段丘上で風がよく吹くところである。

製作は旧師走の寒に入つての一月二十日頃であった。現在も鋳物製作者は、旧師走にふいご祭りをされている。

⑤ 高台で国見山と揖保川や山崎町南部の周囲が見渡せること

周辺の土質は赤土である。

2 歴史的条件が備わっていること

周辺には金谷古墳群がある。

平城京で出土した同型鏡の奈良時代の鏡瑞雲双鸞八花鏡が出土している。

『播磨国風土記』の比治里の中心であること。

弥生時代の石斧や石鏃が出土し二千年前から人が住んでいたことなども背景にあるひとつといえる。

3 梵鐘をつくる技術があったこと

長谷川氏は現存する川戸道場元の鐘、桓武伊和神社の鐘、小茅野位尾神社の鐘から窺える。

江戸時代、明治時代に活躍した宍粟郡で唯一鋳物師の技術集団である。

金谷は揖保川の河岸段

丘上の背景に国見山と揖

保川が蛇行するのがみえ

る位置で、見晴らしの良

い地点である。地理的に

も好条件の地であること

からこの地に伝わったの

であろう。

今回の聞き取り調査は、

長谷川喜一氏、片山英之

氏の有益なご教示により

金屋村鋳物師について少

外科・内科

山 中 医 院

院長 山中陽一

山崎町西町・TEL 620036

しは明らかに became と思う。
 「ふいご」や「吹き屋」と呼ばれる地点や石垣遺構や製錬所と
 伝えられているところも現存している。宍粟郡で唯一鑄物師の技
 術集団であり、貴重な文化財資料であり、次代に伝えることが私
 達の役割ではないかと思ひ紹介させていただいた。

今後の調査については、

- 1 鑄物師の文書の調査と鑄物師を統率していた真継家から鑄物師としての許可状の調査
- 2 江戸時代から明治時代にかけて製作した梵鐘、鍋、釜の調査と鑄造した遺構の分布調査と全体の把握
- 3 長谷川氏（長谷川孫兵衛・五郎兵衛）製作による梵鐘の調査（実測調査を含めて）
- 4 播磨国鑄物師の中の長谷川氏について
 いつ頃、どこからかは不明な点が多く、長谷川氏のルーツを解明できればと思っている。
 これらの項目について郷土研究会員の皆様のご教示をいただければ幸いである。

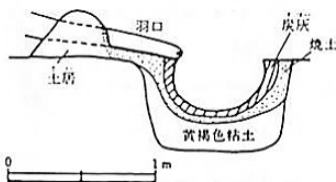


図2 吹床概念図（参考：石垣山遺跡）

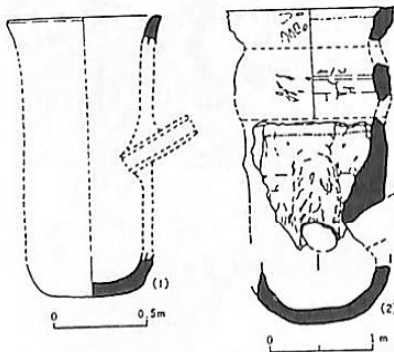


図3 甑炉の復元
 (1) 釜ノ浦遺跡
 (2) 京大教養部構内遺跡

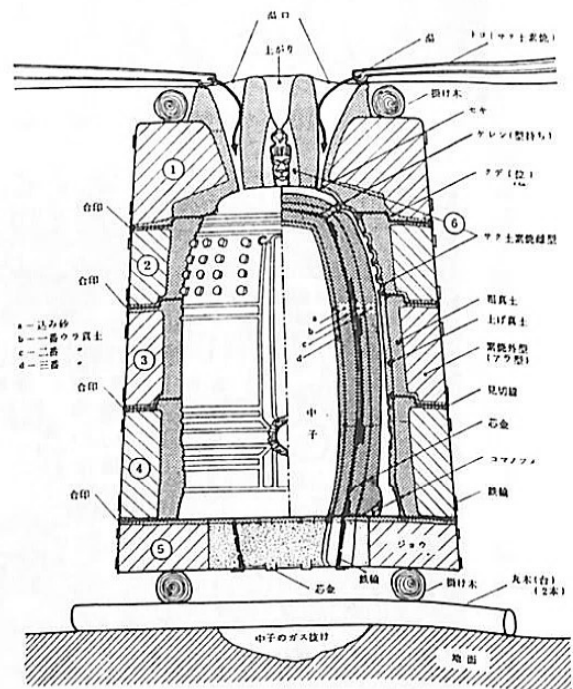


図1 梵鐘鑄型断面模式図『倉吉の鑄物師』より

神崎勝「古代・中世の産銅遺跡の調査」
 『李刊考古学』第62号雄山閣1998

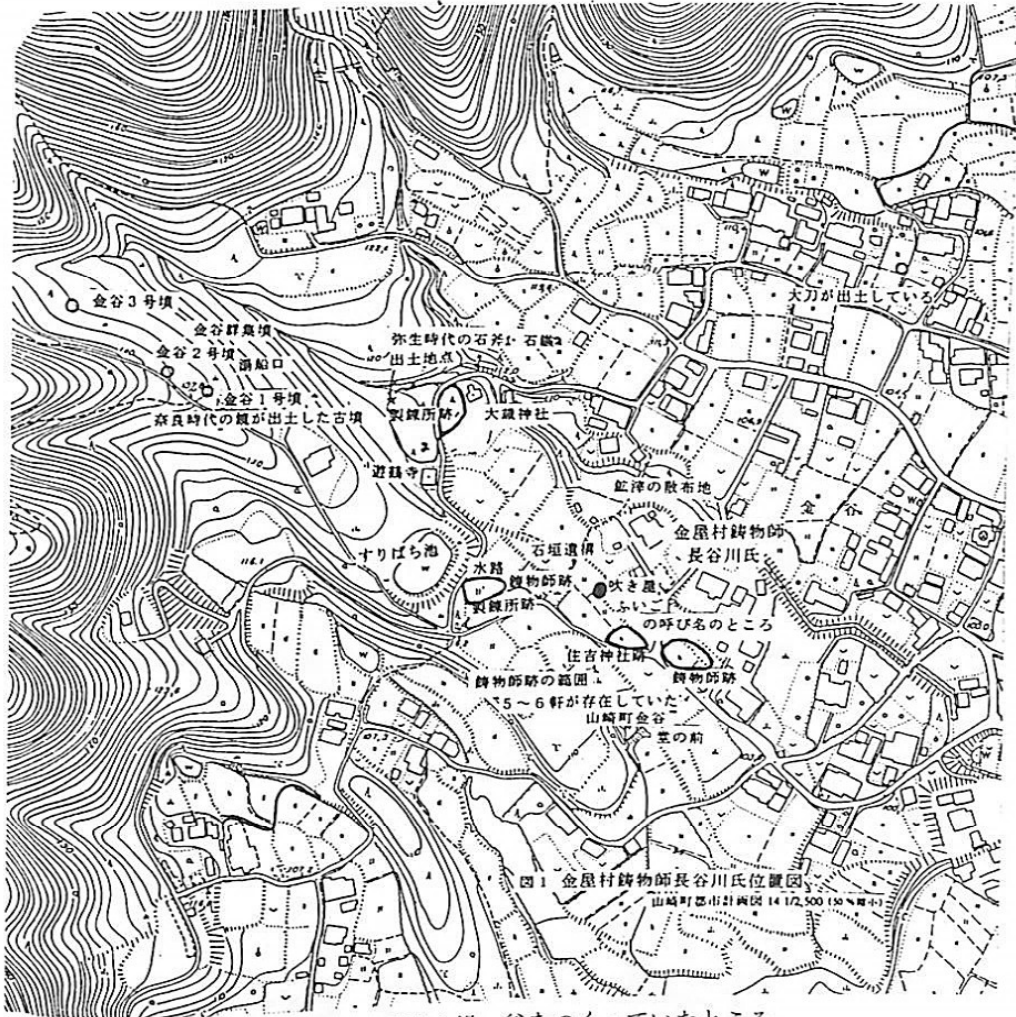


図4 長谷川氏が梵鐘や鍋・釜をつくっていたところ

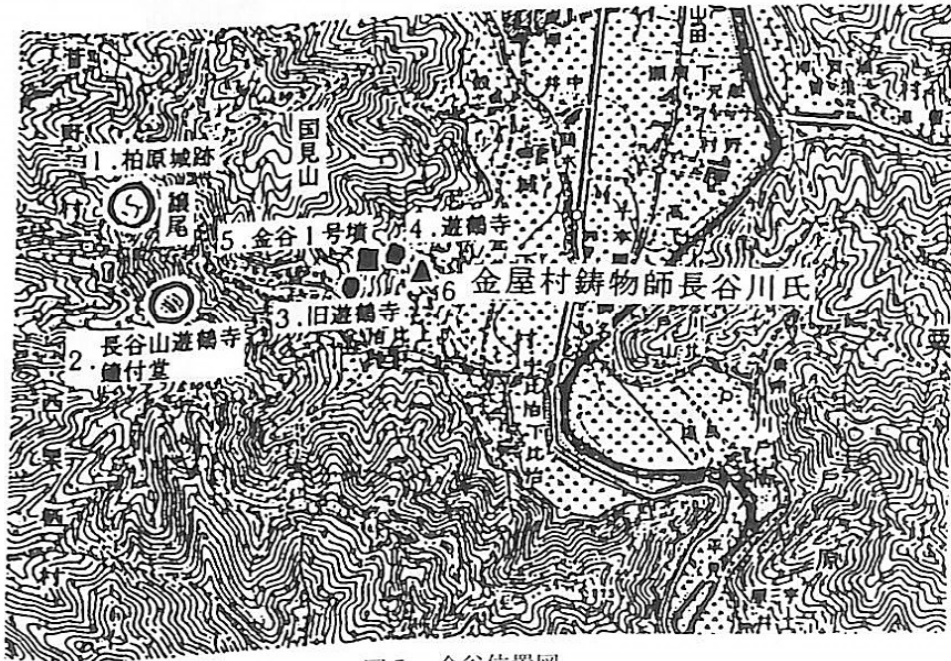


図5 金谷位置図

一枚の古写真から

岸本 正理

今年の三月二日付の神戸新聞西播版に「一宮町の民家で写真発見」という見出しで一枚の写真が大きく掲載されていた。それは、明治から大正にかけて活躍した後藤新平が山崎を訪れ町の有志と懇談し、山崎小学校の南校舎の前で記念写真を写したものである。（新聞記事によると撮影場所は山崎町教委らしいとあるが、私の記憶が正しければ前述の通りである）

写真に写っている人々に混じって私の父も参加している事がわかる。これと同じ写真で大きく鮮明なのが我家の古いアルバムに残っている。この写真が写された年代が一九二三年というと、私が生まれた年の前の年である。父はその時三十四歳であった。その頃の日本はその年の九月一日に関東大震災が起きている。

旅行・観劇・航空券

すぐお応えいたします



〒671-2576 兵庫県宍粟郡山崎町鹿沢68
 (神姫バス山崎待合所内)
 TEL(0790)62-7588
 FAX(0790)62-7589

後藤新平（一八五七〜一九二九年）は、明治・大正時代の政治家で、第一次世界大戦後ロシアは革命の嵐が起こって共産主義のソビエト連邦が生まれようとし、それを食い止めるべく日本もシベリアへ出兵した（一九二三年）が、それは失敗におわり、ソビエト政権を日本もしぶしぶ認めざるを得なくなった。その時の日露交渉の立役者として活躍したのが後藤新平である。

このように日本の政治家として歴史に残る重要な人物が、なぜ山崎のような片田舎に寄ったのであろうか。これからの記述は私の想像であるが、一緒に写真に写っている当時宍粟郡が生んだ有名な代議士だった小畑虎之助が、当時内務大臣で地方都市の整備に力を注いでいた後藤新平を山崎へ招いたのではないだろうか。一枚の写真からいろいろと歴史を想起する。

生谷温泉記

大谷 司郎

生谷温泉については、記録が少ないようですが、史料や聞き取りをもとにその盛衰を辿りたいと思います。

私が史料提供や聞き取りをさせていただいた栗田康夫氏の家が「つたや」の屋号で現在地で宿屋をされていたとのこと、もう一軒紙野氏が経営された宿屋が西隣にあり、都合二軒の宿屋が軒

を並べていたということです。温泉は外湯形式で両宿屋にほど近い山側にありました。温泉として始まったことについては、故伊野澄教氏宅にあつた「生谷鑛泉ノ沿革」等貴重な史料を、提供を受けた生谷温泉伊沢の里が保存していて、それによると以下のようであります。なお、以下は原文を要約して記します。

一、生谷鑛泉ノ沿革

明治一五年（一八八二）五月当地の某女が病氣のため飾磨郡の塩田温泉で湯治し、一旦全快して帰宅したが、同年十月に再発した。塩田温泉には行けない家庭事情があり困っていたとき、

以前から塩氣が多いと噂のあつた当泉に入浴を試みてみると、すぐに平癒したという。それを聴いてリウマチを患っている人や皮膚病の人、慢性胃炎の人たちが次々と入浴したり、服用したりすると、悉く全快した。

その効用は近郷にすぐ伝わった。創傷

心のゆとりのおてつだい

安井書店

YASUI BOOKS

本店 TEL (0790) 62-0700
本さつき通り FAX (0790) 62-2117
ブックランド店 TEL (0790) 64-2051
山崎町中井 FAX (0790) 64-2052

や胃腸病等で悩む人たちが、われ先にと競うように本泉を利用するようになり、混雑を極めることとなった。

同年十二月、宍粟郡役所から本泉の使用が差し止められ水質検査が行われることとなった。翌十六年五月十五日付で本泉には次の薬品等を含含有しているという結果が示された。

格魯兒那篤留母 (塩化ナトリウム) 最夥多

格魯兒加留母 (塩化カリウム) 少量

重炭酸亜酸化鉄 (同上) 僅量

重炭酸曹達 (重曹) 同

同石灰 (炭酸水素カルシウム) 肖多量

格魯兒麻屈兒矢垂 (塩化マグネシウム) 少量

硫酸塩 (同上) 極僅微

磷酸塩 (同上) 痕跡

硅酸 (ケイ酸ナトリウムカ) 僅量

遊離炭 (遊離炭酸カ) 極僅量

また、これらの成分から次の諸病に内外用することにより効果があるとして

慢性胃病 慢性腸管病 肝臓諸病

慢性咽喉炎 慢性気管支炎 萎黄病

貧血病 敬私的里 (ヒステリー) 腺病質

痛風 レウマチス (リウマチ) 神経病

慢性皮膚諸病が記されています。

* () は現在の薬品名、病名

明治十六年五月より翌年五月までの一ケ年間に所々の小風呂で沸かし、一七年五月下旬に湯場を新築して開業し、同年八月三十日をもって許可を受けた。このときから名声が四方に広まり、利用者が増えてきて水が不足するようになったので、明治三十年には新たに一の井を発掘し、同じく水質分析を行った結果、前泉とほぼ同種の水質と認められ、同年十二月二十六日付で許可を受けた。それより益々来客が多くなった。利用者が多くなることによつて、従来の湯場が狭くなり、同三十三年には湯場を増改築した。また、「湯屋取締規則」を整備改正して、三十年一月から三月にかけて湯屋をほとんど改築した。

この記録により、明治十五年に生谷温泉が見出され、正式には十七年に開業したことを確認することができます。

二、冷泉分析表と医治効能、用法用量、鉍泉採酌販売願

また史料としては兵庫県衛生課が発行した「播磨国宍粟郡生谷村冷泉分析表」と、生谷村伊野直蔵が兵庫県令に差し出した「鉍泉採酌販売願」がありますのでそれも要約して紹介します。まず播磨国宍粟郡生谷村冷泉分析表によると、

本泉は無色無臭にして、強い塩味を有しており、器に入れて静置すると器底に沈積物ができる。この沈積物は炭酸石灰及び酸化鉄である。本泉の比重は重く摂氏十度で一・〇一二である。

泉中一リットルを蒸発乾涸して、その固形物の重さを測ると九・三〇グラムあり、そのうち水に溶解するもの九・一六グラム、溶けないもの〇・一四グラムある。水中に含有する塩類は前述のとおりで、この冷泉は含鉄塩化ナトリウム泉に属するものと認定する。

認定日 明治十六年五月十五日 兵庫県衛生課

とあり、また、同衛生課から同日発行されている書類には、

生谷村冷泉分析表により、塩化ナトリウム等の塩類を主要成分として、炭酸鉄等を含


有するため前述の諸病に内外用して効果がある。生谷村冷泉用法用量として、一回の量六尺内外、一日一回または二回服用すべし

明治十六年五月十五日
兵庫県衛生課

として、県の衛生課のお墨付きをもらっています。

一方の鉍泉採酌販売願

きれいなカラープリントの店



コーエカメラ Specialty Camera Shop

本店 宍粟郡山崎町東鹿沢 26-3 ☎ 62 - 2089
フリーダイヤル ☎ 0120 - 440 - 990
FAX 0790 - 62 - 7429
咲ランド店 TEL 0790 - 63 - 0533

によると、明治十七年八月二十五日付で生谷村の伊野直蔵が、生谷村字北山根の井戸から湧出した冷泉について、前述の県の水質検査結果を添えて販売することの許可願いを兵庫県令森岡昌純に提出し、「書面願の趣聞届候事」と同月三十日付で許可を得ています。

三、粟田九郎兵衛君之碑

生谷の公民館の前、玉垣の中に「粟田九郎兵衛君之碑」と刻まれた石碑があります。粟田九郎兵衛の功績を讃えて、交友のあった福原謙七が明治二十六年（一八九三）十一月に記した碑文（森本一二氏解説文を参考にしました）で、その中に「明治十一年ヨリ二十年ニイタルマデ生谷村総代ヲ勤メ、其ノ勤勉十年一日ノ如シ、嘗テ温泉ヲ創メ人ヲシテ病ナカラシメ：」とあり、生谷温泉の創業時の総代として貢献したことが伺えます。

また、同氏は下町方面からの灌漑用水路を敷設するに当たって多大の貢献をした実績があります。用水を引くことにより、同地内の水田面積が倍増し、米が増産されることで村人が潤うという、生谷村にとっては一大事業だったといえます。そのことは、現在でも毎年「石塔の祭り」として、九月に同氏を顕彰し続けていることからその偉業が今に語り継がれていることがわかります。

四・温泉のその後

創業の明治十七年から、大正昭和と時は流れ、戦中の昭和廿年頃には外湯が火事で焼失したため、温泉業は中止されたようです。その後、昭和三十年に生谷温泉「山楽荘」が建築され、再び往時のにぎわいを見せましたが、昭和五十年頃にそれも閉鎖されました。

そして、平成九年四月には再度生谷温泉の復興を期すべく「伊沢の里」が開業しました。今ではその周辺整備も着々と進み、しとう森林王国山崎拠点エリアとして、また、長水城址への登山口の一つとして、今後とも伊沢の里のシンボルとして利用が増えることを望むものであります。

奈良時代の『播磨国風土記』にもある「鹹水」（塩気を含んだ水）が沸き出る塩の村として比定できる歴史のある温泉、生谷温泉の名を今後とも引き継ぎたいものです。本稿にあたりご協力いただいた栗田康夫氏、森本一二氏に感謝いたします。

H15.9.9
伊野靖利代
複数の人から
18年は間違り
で16年の麦秋の
頃であつたとの
情報得た

大谷

十六年六月

都七福神巡りと岩倉実相院詣り

研 修 部

研修旅行の行き先については、東方面と西方面とを交互に行くのが従来の慣例になっていたが、西方面は行き尽くしてしまった状態となったため、方面別という考えを撤廃して、新しい趣向で旅を見直そうということになり、京都を検討した結果、都七福神巡りを実施することにした。

研修旅行があと一週間という時期になって本州付近には秋雨前線が停滞しており、旅行の前日もドシャ降りの状態であって、天候を心配していたが、旅行当日は五時に起床、早速テレビの天気図を見ると本州上に停滞していた前線が太平洋沿岸まで南下していたので、これはしめたと思ひ晴れ晴れとした気持ちで神姫バスの乗場へ向かった。

日曜日の東行きは交通状態もよく、予定時刻よりずいぶん早く京都に到着した。雨上がりでホコリはたたないし好天に恵まれ最高の旅行日和となった。

途中、京都に着くまではガイドさんのあいさつ、旅行日程の説明等のあと、六波羅密寺の仏像のビデオを見て頂き、本日の見どころなどを説明した。

バスは京都南IC↓九条大宮(東寺の横)↓JRの線路を越えて堀川通↓堀川五条から東へ↓五条大橋を渡って間もなく、東山郵便局の前で路上駐車となった。↓バスを離れて五条通から六波

羅南通りを約二〇〇米ばかり北上するとここが六波羅密寺、ここが最初のお寺であるので、七福神巡りの朱印帳の入用の方はそこで買って頂くことにした。

六波羅密寺は九五一年(天曆五)年、空也上人(九〇三〜九七二)により開創された

平安時代後期には、この寺に魅了された時の権力者の平家一門が、広大な境内に五千二百あまりにも及ぶ邸宅を建てた。平清盛はここ六波羅に邸宅を構えたので「六波羅殿」とも呼ばれた。そういう意味で、平家ゆかりの寺院であったが一一八三(寿永二)年の平家没落のときには兵火を受けて本堂以外を焼失した。鎌倉時代には六波羅探題(※)が置かれ、幕府の京都支配の中心となったが幕府滅亡の際にはまたも兵火にさらされた。度重なる兵火で建築物は失ったが、彫刻は焼失を免れ、名宝が多く所蔵されている。空也自らが刻んだといわれる本尊「十一面観音立像」(国宝)は本堂内陣の厨子に収められている秘仏で、十二年に一度、辰の年に開扉される。

このこの宝物館には十五体の木像(全て重要文化財)があり、その中には「空也上人立像」「平清盛座像」「運慶座像」「湛慶座像」「地藏菩薩座像」など、鎌倉時代に造られた写実彫刻の傑作が多数ある。

六波羅密寺には六波羅弁財天が祀られており、弁財天は七福神の中で唯一の女神であり、水を人格化した神で、神話によると、学問と技芸の神として尊信されている六波羅探題を開いた歴代将

軍は、当寺を祈願所と定め爾來、今日に至るも都七福神の一つとして参拝者で賑わっている

ここより再び200米ばかり歩いて大和大路通を北へ進むと恵美須神社がある。ここは鎌倉時代初期に建仁寺の鎮守社として創建されたものである。

※六波羅探題Ⅱ武家時代に重要な地方に置かれた職。その地方の政務訴訟を掌り、内乱外寇の鎮定防御にあたっていた。

恵美須神社から大和大路通りを下り余裕をもってバスに戻ったが予定時刻より約一時間早く順調な進行であった。

バスは五条通りでUターンし↓五条通りから川端通りを北に向かった。↓御池大橋付近で時代祭についてガイドさんの説明があり↓今出川通りを進み↓加茂大橋の所でガイドさんが高野川・加茂川・鴨川の説明があった。

アマタ本店の近くまで来たときには時間が早すぎアマタで駐車するのが困難であったため今出川通りとか白川通りを大きく巡回して頂き、ドライブで時間をつぶし、ようやくアマタ本店での昼食となった。

↓昼食後、アマタ本店でみやげ物のショッピング↓十二時十五分から舞妓さんの踊（祇園小唄）と舞妓さんが入ったの記念撮影（これはアマタと写真屋の合同企画のようであった）↓写真希望者は写真代千円也。

十二時三十五分アマタを出発↓河原町通りを北上し北山通りに出る。北山通りをやや東進したところで左手の山を見上げると五

山の送り火の妙法の「法」の字が見えてきた。「法」の字のある松ヶ崎東山のすぐ下に松ヶ崎大黒天がある。一六一六年（元和二）日英上人が創建の際、法華経の守護神として別棟に祀ったのが大黒天である。正式な寺名は松ヶ崎妙円寺。引き続き北山通りを東へ進む。白川通り修学院離宮道の交差点まで来るとガイド曰く「ここから赤山禅院までは歩いてください。」とのこと、しんどい思いでお寺に到着。ここでお寺の前までバスが入れない事情を尋ねたところ毎年一月の初詣の期間以外はバスは通れない申し合わせになっているとのこと。朝の旅行日程の中で何も言わず、バスが着いてから「ここから歩いてください」はないだろうと思った。ここは福祿寿神が祀っており、比叡山の西麓にある比叡山延暦寺の別院である。

次の目的地は七福神巡りから外れるが、折角洛北まで来たのであるから岩倉の名刹実相院を訪ねることにした。

実相院は皇室ゆかりの門跡寺院で、四脚門、客殿（本殿）、御車寄せは江戸中期に大宮御所から移築されたもの。また、江戸時代、寺院としては門跡寺院のみに飾ることを許された狩野派の襖絵も、その華麗さを伝えている。客殿西奥の池泉回遊式庭園の自然の眺望で心が落ち着いたところで帰途についた。

次の研修旅行（五月）は七福神巡りの後半、前半は洛東・洛北の旅であったが、後半は草堂（寿老神）・東寺（毘沙門天）・萬福寺（布袋尊）ということ洛中・洛南・宇治を巡り、最後に伏見の歴史街道を通って帰る予定である。乞う、ご期待！

「山崎歴史街道」(四)

—山崎町の史跡めぐりをしませんか—

山崎藩城主ゆかりの寺

二〇、青蓮寺(池田輝澄公の祖母と母の菩提寺)

所在地 山崎町山崎一七〇

国道二十九号線、ホテルサフランの南の道路を西へ一〇〇mばかり行くと、昔清水がわき出て旅人が喉を潤したと言う清水口という所がありますが、その北側に清明山青蓮寺があります。西の入り口を入ると、北側に本堂、突き当たりに庫裏があります。また、本堂西には徳川家康側室「西郡の局」の御廟屋(おたまや)があります。

青蓮寺は徳川家康側室西郡の局の菩提寺であって元和四年(一六一八)池田輝澄(姫路城主池田輝政四男)が宍粟郡拝領(三万八千石、のち六万三千石)となり、山崎に初めて城を築いたとき、祖母である西郡の局の菩提寺であった姫路市野里の青蓮寺を姫路より山崎町山田町へ移転して祖母「蓮葉院殿」と母「良正院殿」の菩提追善永代供養のため建立された寺です。

しかし、寺は移転して六十二年後、町家よりの失火で類焼し、本堂、庫裏を焼失しましたが玄関は焼失を免れ、当時のまま現在に至っています。また本堂等は元禄六年(一六九三)から七年に

かけ、池田家により仮堂として再建されましたが寺観は一応整備されておりましたので、この仮堂がそのまま現在に至っています。本堂左角の鬼瓦には再建当時の元禄七年の年号が刻まれています。また寺宝には開山日教の画像がありますが、この肖像画は画家信方によって画かれたもので、我が国の初期洋画として数少ない作品です。

二一、興国寺(池田恒元公の父の菩提寺)

所在地 山崎町上寺一六七

最上山の東側の山裾に上寺という所があり、数ヶ寺の寺院が並んでいます。その中程に楼門のある興国寺があります。

慶安二年(一六四九)松平備後守恒元が宍粟藩主(三万石)となり、この山崎に来たとき、恒元の父池田利隆(姫路城主池田輝政の長男)の菩提所として、父利隆の戒名・興国院殿をとって興国寺とし、菩提寺としました。

恒元は岡山藩主池田光政の弟であり三十九歳のとき入封し、町の整備や、村落での井堰工事、道路補修等町村落行政にも力を入れましたが、寛文十一年(一六七二)亡くなりました。御霊は池田氏廟所のある備前和意谷に葬ってあります。興国寺の裏の墓地には当時の家老であった宮野頼母や淵本弥兵衛の墓などがあります。

また、興国寺本堂正面には本格的な一間一戸楼門形式の山門があります。楼門は二階建ての門ですが、下層に屋根がなく、上・

下の間には高欄つきの回縁がついています。そして山門正面には本庵禅師（黄檗二世）の扁額があります。

☆黄檗宗（おうばくしゅう）。隠元が開祖。京都府宇治市の万福寺が本山。明の臨済宗（禅宗）の一派。二代目本庵のとき大いに発展した。

二十二、大雲寺（本多家菩提寺）山崎町上寺一六九

大雲寺は上寺の寺並の一番南にあり、南に面して山門がありません。山門をくぐって入ると鉄筋コンクリート建てで東向きの本殿があります。

山門は薬医門形式の門で、本柱が門の中心線上から前方にずれています。薬医門は桃山時代に始まった城門の一種で矢喰いが語源かともいわれています。

宍粟郡誌によると池田輝澄が宍粟郡を領した元和のころ大雲寺町ができたとあり、また元和五年（一六一九）に専營の開基と記されているので、輝澄の寺町計画の最初の浄土宗の寺であったと思われるそうです。

延宝七年（一六七九）に本多政貞が大和郡山から来て領主となつてから大雲寺は本多氏の菩提所となりました。本堂にはご本尊の阿弥陀如来像がお祀りしてあり、また左の祭壇には歴代藩主の位牌もお祀りしてあります。

本多氏は延宝七年入封以来明治二年の版籍奉還までの一九〇年間の長きにわたつての治世に取り組んでおり、その間の城主の墓

や、豪商と思われる鳩屋、千草屋等の墓が裏の墓地に見られます。

「事務局だより」

★役員の変更

三月十一日に防災センターで開催した平成十三年度の定期総会において、会則変更が提案され、役員の名において副会長二名が一名に、部長が四名から三名に変更されました。

その結果、久保寅夫副会長と志水美好副会長が辞任され、前総務部長の柳田弘さんが副会長に推挙されました。総務部長の役は廃止されました。その他の役員については本会報に掲載しております。

★御寄付のお知らせ

前研修部長として本会に御尽力くださいました故垣口正信様の奥様ちる子様より、御供養として一金十万円を戴きましたので会員の皆様にお知らせします。

平成十三・十四年度

監事	三宅保雄	監事	河本雅視	土万地区支部長	高畑義一	菅野地区支部長	河本雅視	葛沢地区支部長	久保寅夫	神野地区支部長	春名俊夫	河東地区支部長	織金達雄	戸原地区支部長	志水正信	城下地区支部長	西村清	山崎地区北支部長	横野一男	山崎地区東支部長	仁尾永	山崎地区西支部長	高野薫	事務局長	岸本正理	史跡部長	志水正信	研修部長	織金達雄	会報部長	大谷司郎	副会長	柳田弘	会長	堀口春夫	顧問	壺阪壽	顧問	赤松茂毅	名誉会長	白谷敏明
住所																																									
電話																																									

役員

史跡部長 志水正信										研修部長 織金達雄						会報部長 大谷司郎				平成十三・十四年度 各部構成
柳田弘	伊藤一郎	仁尾永	長田洋三	山根一視	横野一男	垣口ちゑ子	岸本正理	栗下憲一	大上善示	岸本実了	高野薫	工藤栄治	浅田耕三	河本雅視	織金達雄	藤村清一	谷川ヒデ			